

高清水町文化財調査報告書第1集

高清水城跡

平成10年3月

高清水町教育委員会

高 清 水 城 跡

序 文

高清水町には、私たちの祖先が残した数多くの遺跡があります。これらは、豊かな自然環境に守られ、長い歴史を経ても破壊されることなく、いま伝えられている貴重な文化遺産でございます。この先人の歴史や文化を愛護するとともに後世に伝えて行くことが、私たちに課せられた責任であります。

このたび、町民が長いこと待ち望んだ高清水中学校屋内運動場を新築することになり、その建設場所が高清水城跡の外堀に立地していることから、宮城県教育庁文化財保護課のご協力により平成9年8月18日から9月17日まで発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、要害である高清水城跡が機能していた戦国時代から江戸時代のものだけでなく、平安時代の掘立柱建物跡を構成する柱穴の一部が見つかりました。また、絵図でしか知ることができなかった外堀の規模や方向そして新たに「馬出し」が確認されたことから、外堀が掘られる以前に、この付近に城内への出入口があったことがわかるなど、貴重な資料が得られました。

今回の調査で、残されている絵図面によって想像していた平面的な高清水城が、奥行きや立体感を得て、高清水人の誇りとして位置づけることのできる真実のものになったことに感動しております。

ここに報告書を刊行するにあたり、調査に際しましてご協力頂きました宮城県教育庁文化財保護課並びに関係された方々に深く感謝を申し上げますとともに、これから時代を担うみなさまにとって少しでもお役にたつものであれば幸いと存じます。

平成10年3月

高清水町教育委員会

教育長 狩野伊一郎

例　　言

1. 本書は、栗原郡高清水町字東館に所在する高清水城跡の平成9年度発掘調査の報告書である。
2. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の協議を経て、佐藤貴志が行なった。
3. 本書における土色についての記述には「新版標準土色帳（1973）」を利用した。
4. 本書の第1図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「高清水・築館・真坂・荒谷」を複製して利用した。
5. 遺構略号は次の通りで、通し番号で各遺構に付した。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SK：土壤 SX：整地層
6. 陶磁器の分類や年代観については、本田泰貴氏（東北陶磁文化館）より御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表す。
7. 調査の記録や整理に関する資料および出土品については、高清水町教育委員会が一括して保管している。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境.....	1
1. 高清水城の位置.....	1
2. 周辺の遺跡.....	1
3. 高清水城の現状と推定される城郭構造.....	3
4. 高清水城の歴史.....	4
第Ⅱ章 調査に至る経緯と調査の方法.....	5
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物.....	6
1. 中近世.....	6
2. 古代.....	15
第Ⅳ章 考 察.....	17
1. 中近世の遺構と出土遺物.....	17
2. 古代の遺構と出土遺物.....	19
第Ⅴ章 まとめ.....	20
参考・引用文献.....	20
写真図版.....	21

調査要項

遺 蹤 名：高清水城跡（宮城県遺跡記載番号：44024）

遺 蹤 記 号：TA

所 在 地：宮城県栗原郡高清水町字東館

調査原因：高清水中学校体育館移転新築事業に伴う事前調査

調査面積：約1900m²（調査対象面積：約2050m²）

調査期間：第1次調査（確認調査）平成8年7月1日

 第2次調査（事前調査）平成9年8月18日～9月18日

調査主体：高清水町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：第1次調査（確認調査）真山 悟・後藤 秀一・古川 一明

 第2次調査（事前調査）天野 順陽・高橋 栄一・佐藤 貴志

調査参加者：只野 均・浅沼 直志・菅原 ゆう子・菅原 とき子・守屋 敏・千葉 進・佐藤 文二

 佐藤 久代・菅野 はつゑ・川島 優子・沼倉 孝子・中津川 のり子・高橋 八千代

 太齋 きし子・鈴木 次雄・佐藤 寛志・大槻 とみゑ・熊谷 英喜・岩渕 久子・真山 和子

整理参加者：菅原 友子・佐藤由美子

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 高清水城の位置

高清水城跡は栗原郡高清水町字東館に所在する。本城跡は高清水町役場の約600m南東にあり、本丸跡と伝えられる場所には現在高清水中学校が建つ。本城跡の東隣を東北新幹線が南北に通っている。

本城跡が所在する高清水町は宮城県北西部に位置しており、栗原郡の最南端部にあたる。地形をみると、栗原郡付近には奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が発達しており、高清水町はその末端部に位置する。築館丘陵は高度を減じながら高清水町の北部・西部・南部に展開しており、町内を東流する善光寺川・小山田川・透川によって複雑に開析され、いくつかの樹枝状の地形を形成している。そのなかに町のほぼ中央部を北西から南東に延びる低丘陵があり、北を善光寺川、南を小山田川が流れている。この丘陵は標高60~20mと徐々に高度を下げながら南東部に広がる沖積地へ続いている。本城跡はこの丘陵の南東端部にあり、標高約20m前後の広い平坦面に立地している。

2. 周辺の遺跡（第1図）

現在、高清水町には36ヵ所の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、本城跡の北東約800mの地点に大寺遺跡がある。ここで発見された沈線文・貝殻腹縁文の尖底土器は、遺跡の名をとって大寺式土器と命名され、現在縄文時代早期の指標となっている。他にも、縄文時代前期の宿ノ沢遺跡、晚期の萩田遺跡などがある。大寺遺跡や萩田遺跡はまた弥生時代の遺跡もある。大寺遺跡では弥生時代末期の土器が、萩田遺跡からは弥生時代中期の土器とともに大型棒状太口蛤刃磨製石斧が出土している。

古墳時代の遺跡では本城跡の東隣に東館遺跡がある。方形周溝墓が検出され、そこから供獻用の土師器壺が出土している。

奈良・平安時代の遺跡では、五輪C遺跡、手取遺跡、宮の脇遺跡などがある。本城跡の北西約1.3kmの地点にある五輪C遺跡からは当時の竪穴住居跡が見つかっており、集落跡と考えられている。東館遺跡では平安時代の遺物包含層と少量の土師器が確認されている。

中・近世の遺跡としては新庄館（新城館）跡、陣館、運難館の城館跡がある。新庄館は善光寺川を挟んで本城跡の北東約800mに位置し、丘陵末端にある東西に広がる段丘状の低山に立地する。昭和49年の発掘調査では通路状遺構、段状遺構が確認された。新庄館には前九年の役で安倍貞任・宗任軍に加わった清原氏の一族である新庄甲賀守が室町初期より住んだと伝承される。陣館及び運難館は高清水町の北西端の丘陵上に立地する。陣館については『仙台領古城書上』に「山陣館城」として「此所は昔、頼朝卿発向の時、泰大衛郎従差し置き候小屋跡」とある。運難館は運難神社の裏手にその跡が認められるが、城館ではなく屋敷跡とみえる。ここには本山流寿命院先祖真山氏部が住んだと伝えられる。

城館以外の中世の遺跡としては東館遺跡、観音沢遺跡などがある。東館遺跡では堀跡が6条検出されている。観音沢遺跡は本城跡の約1km南に位置し、掘立柱建物跡、井戸跡などの遺構とともに甕・壺・擂鉢といった日用雑器、木製品などの遺物が見つかっており、中世の集落跡と考えられている。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	高 清 水 城	勝 順 正 積 鹿	城	中世	32	施 無 駒 騎	勝 丘	城	中世
2	東 駒 道	勝 順 丘 合 金	城	平安～平安	33	連 駒 騒 駒	勝 丘	城	平安
3	明 正 駒 道	勝 順 丘 合 金	城	平安・中世	34	宮 ノ 駒 道	勝 丘	城	平安・中世・近世
4	大 駒 道	勝 順 丘 合 金	城	古	35	東 駒 騒 駒	勝 丘	城	平安
5	下 沢 木 道	勝 騒 駒 金	城	平安	36	新 一寺 駒	勝 丘	城	近世
6	下 佐 駒 道	勝 騒 駒 金	城	古	37	市 ノ 坂 駒	勝 丘	城	中世
7	覚 の 施 道	勝 騒 駒 金	城	古	38	櫛 ノ 駒 騒 駒	勝 丘	城	近世
8	五 游 A 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・治承	39	下 新 佐 道	勝 丘	城	平安
9	神 山 道	勝 騒 駒 金	城	古	40	新 江 川 道	勝 丘	城	鎌倉
10	五 游 C 道	勝 騒 駒 金	城	治承	41	大 駒 騒 駒	勝 丘	城	平安
11	森 駒 日 道	勝 騒 駒 金	城	古	42	新 墓 道	勝 丘	城	平安
12	野 木 日 道	勝 騒 駒 金	城	平安	43	新 墓 道 駒	勝 丘	城	中世
13	明 宮 道	勝 騒 駒 金	城	古	44	殿 上 駒	勝 丘	城	中世
14	勝 貞 ハ 町	勝 騒 駒 金	城	古	45	大 駒 騒 駒 北 通 駒	勝 丘	城	中世
15	新 ハ 町	勝 騒 駒 金	城	古	46	古 駒 騒 駒	勝 丘	城	中世
16	上 新 ハ 町	勝 騒 駒 金	城	不詳	47	的 務 山 道	勝 丘	城	古
17	軒 田 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・治承・平安・古	48	連 佐 東 道	勝 丘	城	古
18	台 町 西 道	勝 騒 駒 金	城	古	49	町 田 道	勝 丘	城	古
19	凌 川 道	勝 騒 駒 金	城	古	50	新 一 通 駒	勝 丘	城	古
20	内 野 A 道	勝 騒 駒 金	城	古	51	森 石 道	勝 丘	城	古
21	松 ノ 木 民 田 A 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・古	52	前 通 道	勝 丘	城	古
22	内 野 B 道	勝 騒 駒 金	城	古	53	新 石 日 通 駒	勝 丘	城	古
23	松 ノ 木 民 B 道	勝 騒 駒 金	城	古	54	中 三 代 通 駒	勝 丘	城	古
24	觀 青 許 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・治承・平安・中世	55	二 代 通 駒	勝 丘	城	古
25	伊 沢 里 蔊 草 道	勝 騒 駒 金	城	古	56	三 重 道 駒 (町 史 駒)	勝 丘	城	古
26	中 の 里 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・古	57	天 月 通 駒	勝 丘	城	古
27	丹 門 寺 道	勝 騒 駒 金	城	中世	58	櫛 駒	勝 丘	城	古
28	外 院 通 道	勝 騒 駒 金	城	古	59	總 駒	勝 丘	城	古
29	西 手 取 通 道	勝 騒 駒 金	城	櫛文・治承・平安	60	西 ハ 駒 道 (町 史 駒)	勝 丘	城	古
30	新 ハ 町	勝 騒 駒 金	城	古					
31	下 田 道	勝 騒 駒 金	城	古					

第1図 高清水城跡の位置と周辺の遺跡

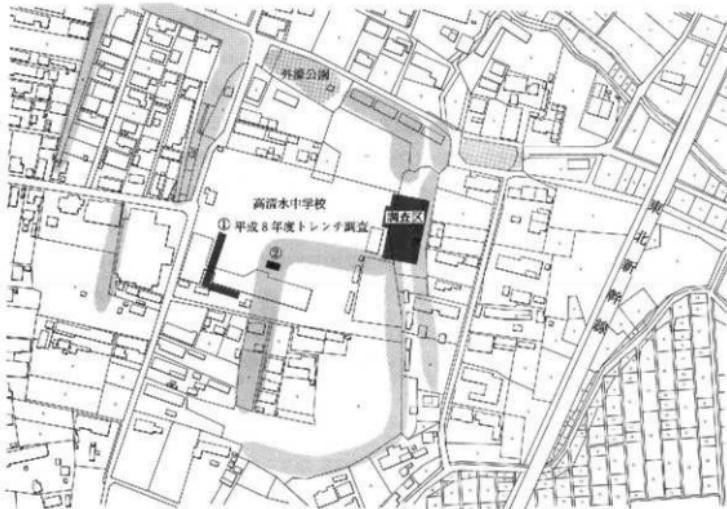
3. 高清水城跡の現状と推定される城郭構造

高清水城跡の遺跡の範囲は東西、南北とも約550mで、やや膨らみをもつ方形を呈する。現在城跡の大部分は、高清水中学校の敷地や宅地などになってしまい、後世の改変が加えられている。城跡付近では堀の一部分と思われるものがため池や水路として残っていたり、町民の憩いの場となっている「外濠公園」に往時の面影を窺い知ることができるほかは、現地形から明確に高清水城跡の遺構を確認することはできない。

そこで、高清水城跡の城郭構造について貞享五年(1688年)亘理藤吉製作と伝えられる『高清水要害屋敷絵図』を参照する。

これをみると、居所(本丸)は城の南東部に位置しており、ほぼ長方形を呈する。これを堀及び土塁が取り囲んでいる。また、南西隅付近には二の丸へ通じる四脚門の「詰之門」がある。その南には橹状の建物が描かれている。居所の北側と西側には二の丸と考えられる区域が広がり、この縁辺にも堀及び土塁が認められる。この堀は四方に巡らされたものではなく、南辺及び西辺南半部を欠き、城の北側を「匂」字状に画しているといえる。そのうち、西辺中央には櫓造り八脚門と伝えられる「大手門」が設置されている。この位置は、現在の高清水中学校校門にあたる。そのさらに南にも四脚門の「中門」がある。

これらの堀は直線的に延びたもののほかに池状を呈するものがあり、各々が連続的に配置されて、いわゆる「堀」を形成しているといえる。この堀の配置が「鬼」の字形に近いことから、当時は「鬼ヶ城」とも呼ばれていたという。また、この周囲には下中屋敷、寺屋敷などが描かれている。



第2図 高清水城跡の模式図と調査区の位置

次に規模についてみていく。高清水城跡の範囲は内外二重に巡る堀の配置から、東西約400m、南北約250mのほぼ長方形を呈するものと推定できる。これらを詳細にみていくと、居所(本丸)は「東西六十三間(約113m)、南北百二十間(約184m)」で、それを取り囲む堀は場所により多様であるが、「幅十五間(31.9m)、深さ六・四尺(約10.8-7.2m)」の規模をもつ。二の丸にめぐる堀も多様であり、「幅十五間・三間半(約27.5.4m)、深さ五尺・四尺五寸(約0.9-1.3m)」である。土塁は居所を巡るもので「高さ二間(約4m)」前後、縁辺部については西辺が「高さ一間半・五尺(約2.7-0.9m)」、東辺が「高さ三間四尺五寸・三間(約6.6-5.4m)」であり、東辺の土塁が比較的高く築かれている。

4. 高清水城の歴史

高清水城の築城者や築城年代については、寛政八年(1796年)東館館下の農夫が著した『高清水拾遺志』をみると、

「○御居館

御書上御要害之地也、仍テ之ヲ省略ス

当塙大崎左京太夫義兼二男左京太夫義直弟高清水木工権頭直堅之ヲ築ト云

一中略一

高泉家譜ニ曰大崎左京太夫從五位上義直弟直堅達天聰木工権頭ニ任ジ高清水ヲ領而居城ト為ス」

とある。ここでは、要害としての存在は記載されているが、要害の規模や構造については省略されている。築城者は大崎十代義兼の二男直堅であり、居城の記録がある。直堅は大崎氏分家である高泉家に入婿して、高泉直堅を称した人物である。

また『高清水拾遺志』の新城館の項目で、高清水城の築城について触れている箇所がある。

「高清水直堅天文年中今ノ御要害初メテ築キ、天正十四年之改テ居住ス然バ延文ヨリ爾來明城ナルヤ又山城ニテ住候シク今ノ御要害新ニ築シカ」

これを解すると、天文年間(1532-54年)直堅が高清水城(要害)を築き、天正14年(1586年)にはここを改めて普請したとあり、延文年間(1356-60年)以来高清水城があったのか、新庄館が住みにくいため天文年間(1532-54年)この場に移り初めて築城したのか、それについては不明である、との記載である。

以上より、築城者は「直堅」と考えており、築城年代については「延文元年(1356年)」と「天文年間(1532-54年)」の二つの見方がある。

◆1964年に狩野陸三氏が著した『高清水物語 改訂版』では、

「詮持の次男、出羽守持家始めて柴原郡高泉城を築いた 一中略一 世間ではこの城を大崎西殿とも言つた。この時は名ばかりの城であったが持家の養子定家、定家の養子で大崎左京太夫義兼の三男、木工権頭直堅の代に至って略々高清水城が出来上がった」と捉えている。持家は大崎三代詮時の二男で、高泉氏の始祖である。築城年代については、巻末年表に「延文元年(1356年)、大崎木工権頭直堅、今の東館に平城を造営し高泉城と称す」との記載があり、築城者を持家と考えている。

次に、高清水城の居城者についてみていく。

中世における居城者については上述の記録のほかに、『高清水拾遺志』に天正年間(1573-91年)初め高泉長門直隆が伊達家に奉公に出た後、石川越前隆尚が住んだとある。また、天正18・19年(1590-91

年)の大崎・葛西一揆に際しては、高清水城が二度にわたって伊達政宗の陣所となつたと伝えている。近世の記録は『高清水風土記御用書出』を参照し、以下に概略する。

慶長9年(1604年)、涌谷城主亘理美濃守重宗の隠居の願い出に対し、伊達政宗は天正18・19年(1590・91年)の大崎・葛西一揆以後領有していた高清水の地を与えていた。この時高清水の石高は1万石であった。慶長11年(1606年)には伊達政宗の実子である又治郎が重宗の娘に配され、高清水城主として当地に着任している。同時に重宗も又治郎後見として高清水に移り住んでいる。又治郎は父政宗の一字を賜り、亘理伯耆守宗根と称された。これが亘理氏の治世の始まりである。

その後、宝曆7年(1757年)に亘理五代倫篤の佐沼への移封が実施された。これにより代わって当地を拝領したのは加美郡宮崎館主の石母田長門興頼である。仙台藩の上級家臣は城、要害、所、在所を各自拝領していたが、石母田氏に与えられたのが高清水要害であった。石母田氏の治世は明治維新まで約110年間続く。明治6年(1873年)の学制施行の際、石母田氏は邸内大広間を小学校教場として開放し、小学校開設に尽力したという。

第II章 調査に至る経緯と調査の方法

高清水城跡の調査は、高清水中学校体育館移転新築事業に伴うものである。

当初提出された計画案によると、体育館建設予定地とされた地点は高清水中学校敷地の南西隅部分、現体育館とはほぼ同位置であった。この地点は周知の遺跡である高清水城跡にあたることから、まず平成9年7月に、遺構の存在の有無や遺跡の広がりを把握するための確認調査を行った。対象地点を中心にしてトレンチを任意に設定し、重機により表土を除去して遺構の確認を行った。その結果、①地点(第2図①)で、現地表面下70cm程の所で遺構面を検出した。遺構面は黄褐色ローム層(地山面)で、その上面から柱穴、土壙などの遺構が確認された。遺物は出土していない。また②地点(第2図②)では、現地表下約2.5mの所まで掘り下げたが、地山面まで達することはできなかった。これらの検出状況から、①地点は高清水城の主郭内、②地点は堀跡の一部であることが考えられた。

そこで、高清水町教育委員会では計画案の変更を検討するに至った。

新たに計画された建設予定地は、高清水中学校敷地の東に接する耕作地であった。この地点は高清水城の東辺部にあたり、堀が置かれていた区域であり、堀跡をはじめ城に関わる遺構、遺物の存在が想定された。そこで高清水町教育委員会と協議を行った結果、事業に先立ち発掘調査を実施することになった。

調査区は南北約55m、東西35~30mの長方形を呈し、調査面積は約1900m²である。調査区西縁辺部に高清水中学校の敷地を若干含んでいるが、調査区の大部分(約3/4)は耕作地である。中学校敷地と耕作地では2.5~1.5mの比高があり、一段高くなっている中学校敷地側では、土壠の残存も予想された。耕作地は後世の造成等により階段状を呈し、北と南では70~50cmの比高をもち南が一段高くなっている。

る。

調査は平成9年8月18日から開始し、約1ヵ月間実施した。まず、重機によって調査区の表土除去を行い、その後遺構の精査を行った。調査にあたり、調査区中央部の杭を座標原点とし、3m×3m のグリッドを設定した。原点の国家座標は次の通りである。

〔座標原点 国家座標X = -149580 Y = 16227〕

精査した遺構は設定したグリッドをもとに1/20の縮尺で平面図及び断面図を作成した。また35mm白黒・カラーリバーサル、6×7カラーリバーサル写真による記録も併せて行った。

9月13日に地域住民を対象に現地説明会を行い、約50名の参加を得た。16日には高清水中学校の生徒全員を対象とした現地説明会を実施した。

第III章 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は古代、中近世の二時期に分けることができ、ほとんどが中近世のものである。以下、時代ごとに説明を行なう。

1. 中近世

①発見された遺構

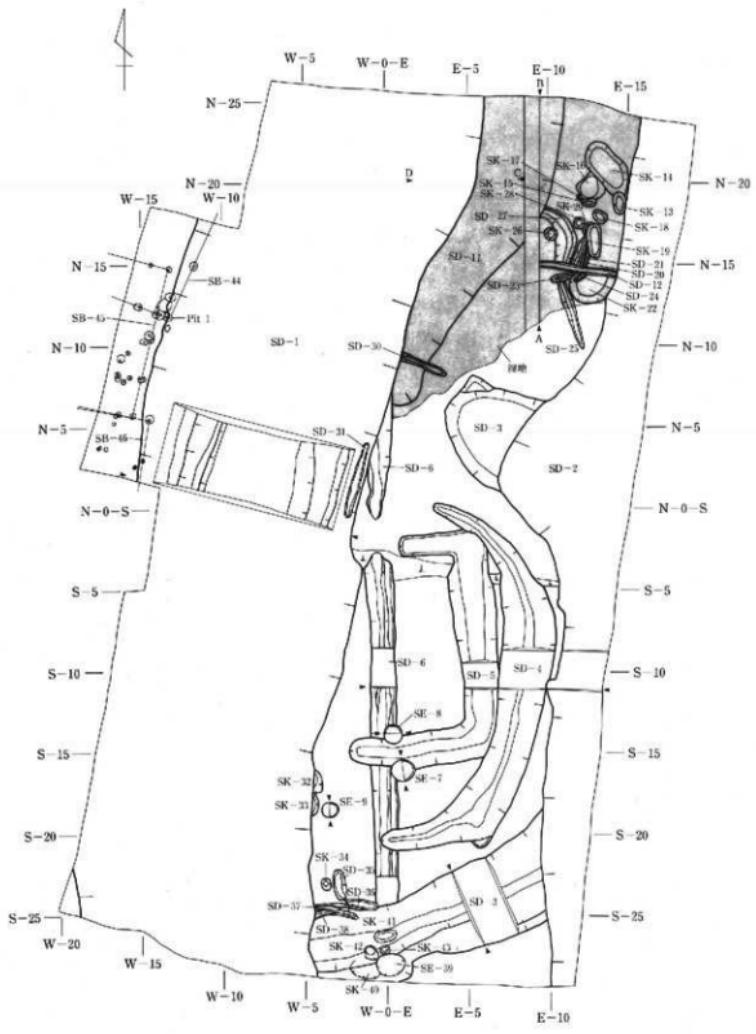
中近世の遺構は調査区全域にわたり確認された。遺構は黄褐色ローム層上面(地山面)で検出している。遺構は溝跡12条、井戸跡4基、土壙7基である。大規模な溝跡については掘り下げるに従い涌水が著しく堆積土の崩落が生じ、底面までの調査が困難であった。また堆積土の崩落に伴い建造物への影響も心配されたため、やむをえず部分的な調査となった。井戸跡も同様、涌水が著しく堆積土の崩落の危険が生じたため、底面まで調査できたものはほとんどない。

以下、主要な遺構について説明を行い、その他については一覧表を作成した。

溝跡(第4図④～⑥)

【SD-1】調査区西半部を占める大溝で、調査区内では南北方向にはほぼ直線的に検出された。SD-30・31、SK-32・33、SX-47と重複し、これらより新しい。断面は逆台形で、上幅約14.5m、下幅約5.0m、深さ約3.2mある。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。両壁面の中途には段がみられる。比較的残りの良い西壁面で三段、東壁面では二段確認された。段は堆積状況から、改修により生じたものと思われる。堆積土は大別で5層(I～V)に、細別で29層にわたることができる。

I層(1～13層)は粗砂を多く含む砂と粘質土からなる比較的均質な自然堆積層で、黒褐色及び黒色を帯びている。壁側ほど砂が占める割合が多くなり、下層ほど黒味が強くなる。部分的に未分解の植物遺体を含む層が介在する。II層(14～15層)は黒褐色及び黒色の粘質シルトからなる。明黃褐色及び黄褐色の地山シルトをブロック状に不均質に含んでいる。III層(16～22層)は均質な自然堆積層で、上



第3図 遠構平面図

層（16～18層）の黒色シルト質粘土と下層（19～22層）のオリーブ黒色砂質シルトに細分される。上層には未分解の植物遺体が含まれる。IV層（23～25層）は黄灰色シルト層である。肉眼的には黄色味及び褐色味が強い。地山ブロックを多量に含み、改修時のものと思われる。V層（26～29層）は黒褐色のからなるシルト質粘土層（26層）と灰黄色シルト・砂などのしまりのない水成堆積層（27～29層）からなる。壁際はグライ化している。遺物はI層（1～13層）出土が大部分で、19世紀中葉の肥前産染付磁器碗（第5図1）、18世紀後半～19世紀の瀬戸産行灯皿（第5図5）、19世紀前半の大堀相馬産（？）の土鍋、中世陶器片などがある。

【SD-2】調査区の東端をSD-1と平行して延びる南北溝である。調査区の制限から西半部のみの検出であった。SD 3・4、SX-47と重複し、これらより新しい。壁はやや角度をもって立ち上がるものと思われる。底面は確認されていない。1・2層は均質な自然堆積層、3層は地山ブロックを不均質に含む自然堆積層である。4層はほぼ均質な自然堆積で、未分解の植物遺体を比較的多く含む。部分的にグライ化している。堆積土中から19世紀の堤焼甕、明治期の大堀相馬産土瓶、中世陶器片などが出土している。

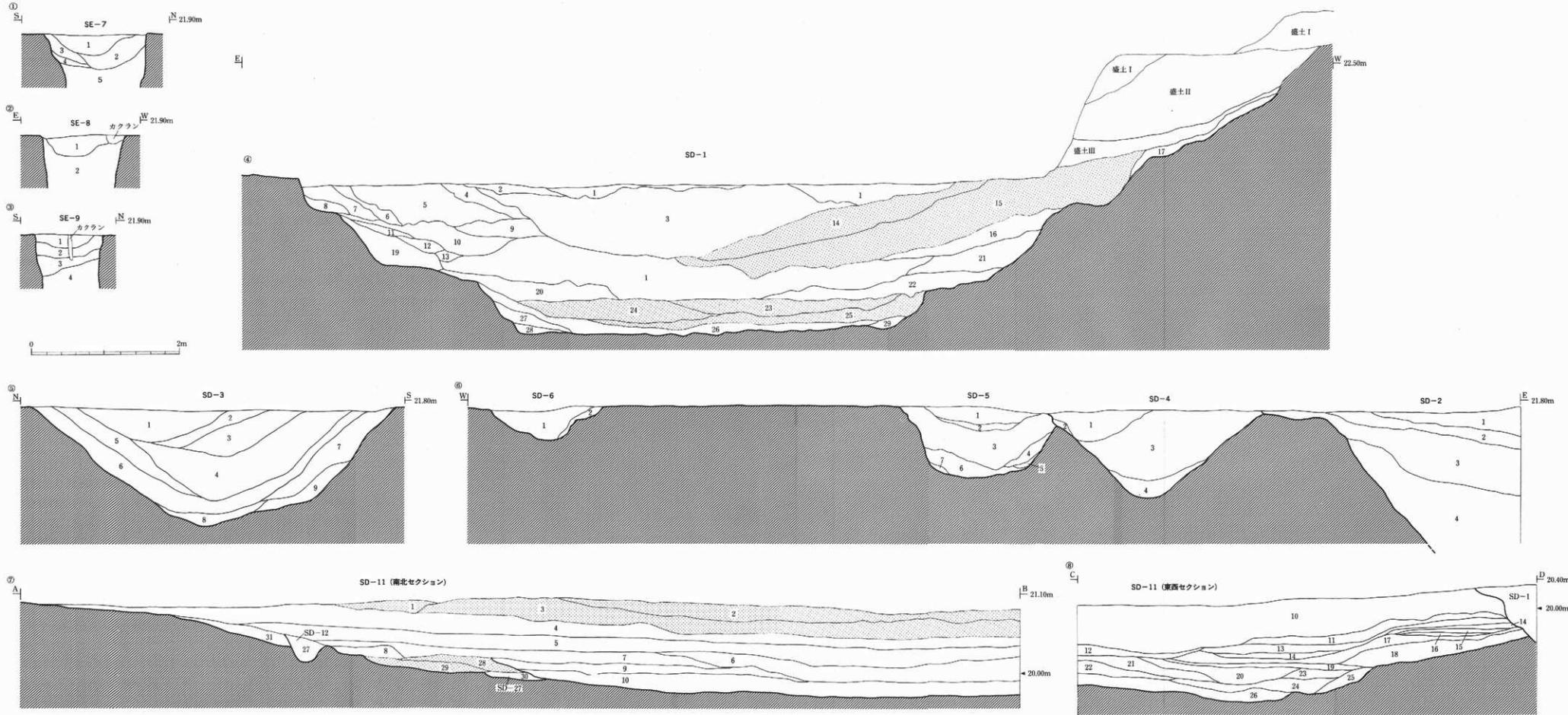
【SD-3】西側が開いた弧状を呈する溝である。溝の東側をSD-2に、南先端をSD-1によって壊されており、北先端と南側部分のみの検出である。重複関係はSD-1・2・36より古く、SD-6・37・38、SK-40～43、SE-39より新しい。上幅5.4～3.6m、下幅1.4～0.8mで、深さは2.6～2.1mある。両先端を結んだ長さは約30m程ある。底面は平らな所が多く、壁の立ち上りは比較的緩やかである。1～7層は地山ブロック及び地山粒を含み、人為的埋め戻しと思われる。8層は自然流入による粗砂層で、9層は崩落土である。遺物は出土していない。

【SD-4】西側が開いた弧状を呈する溝である。重複関係はSD-2より古く、SD-5・6より新しい。規模は東側で上幅約3.1mあり、先端に向かうに従いやや狭くなる。下幅約30cm、深さ約1.2mある。両端を結んだ長さは約20mである。底面はほぼ平坦で、断面形は開き気味の「U」字形を呈する。堆積土はしまりのない黒褐色粘質シルトの人為的埋土（1～3層）と粗砂の自然堆積層（4層）に大別できる。1～3層には地山ブロックを含む。堆積土中から14世紀前半の龍泉窯系青磁（第5図3）、14世紀後半の瀬戸平碗、古錢「元祐通寶」（第6図26）などが出土している。

【SD-5】西側が開いた「コ」字形を呈する溝である。重複関係はSD-4、SE-7・8より古く、SD-6より新しい。上幅約2.5m、下幅約1.0mで、深さは1.0mある。両端を結んだ長さは約10mである。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、壁はやや角度をもって立ち上がる。1～3層は人為的に埋め戻された暗オリーブ褐色～黒褐色粘質シルトからなり、部分的に炭を含む。4～7層は粗砂層主体の自然堆積である。人為的埋土からは、クロロ調整の土師質土器（第5図13～17）がまとまって出土した。

【SD-6】南北方向に直線的に延びる溝である。重複関係はSD-1・3～5、SE-7・8より古い。残存長は約30mで、上幅約1.5m、下幅約30cm、深さ約40cmの規模をもつ。断面形は弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。東壁面中途に段をもつ。1層はほぼ均質な黒褐色粘質シルトが堆積している。2層は崩落土と思われる。堆積土中から手づくねの土師質土器（第5図12）が出土している。

井戸跡（第4図①～③）



第4図 遺構断面図（中近世：①～⑤ 古代：⑦～⑩）

【SE-7】SD-5 南先端部で検出された素掘りの井戸跡である。重複関係は SD-5・6 より新しい。平面形は円形を呈する。直径は約1.4mある。上部南壁面は崩落のためか若干の凹凸が認められる。上層(1~2層)は地山小ブロックや炭化物を含む人為的に埋め戻された黒褐色シルト層で、下層(3~5層)は黒褐色シルトの自然堆積である。遺物は出土していない。

【SE-8】SE-7 の南隣に位置する素掘りの井戸跡である。重複関係は SD-5・6 より新しい。平面形は円形を呈する。直径は約1.1mある。堆積土は比較的均質なシルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

【SE-9】SE-7・8 の南西に位置する素掘りの井戸跡で、平面形は円形を呈する。直径は約90cmある。堆積土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SE-39】調査区南端で検出された素掘りの井戸跡である。重複関係は SD-3 より新しい。平面形は円形を呈する。直径は約1.5m、深さ2.4mある。堆積土は地山粒を含む黒褐色シルトの自然堆積である。遺物は出土していない。

整地層(第4図⑦)

【SX-47】整地層は調査区北端で確認された。SD-11 の上面を整地したものであるが、残存状況は悪い。重複関係は SD-1・2 より古い。整地の範囲は調査区外へ不整形に広がっていくものと考えられる。

遺構	N	奥行き(m)	深さ(m)	幅(m)	平面形	層	備考
SD	30	3.0	0.2	0.4		SD1 より古い	
SD	31	4.8	0.1	0.5		SD1 より古い	
SK	32	1.4	0.3	—	楕円形	SD1 より古い	
SK	33	1.5	0.4	—	円形	SD1 より古い	
SK	34	0.7	0.15	0.5	楕円形		
SD	35	1.9	0.2	0.8			
SD	36	2.0	0.2	0.5		SD0-6 より新しい	
SD	37	2.2	0.2	0.4	楕状	SD0-6 より古い	
SD	38	2.8	0.3	0.3	楕状	SD0 より新しく、SD1 より古い	
SK	40	1.8	0.15	—		SD0, SE39 より古い	
SK	41	1.8	0.1	0.7	楕円形	SD0 より古い	
SK	42	0.9	0.7	0.25	楕円形	SD0 より古い	
SK	43	0.6	0.1	—	円形	SD0 より古い	

表-1 その他の中世遺構

②発見された遺物(第5・6図)

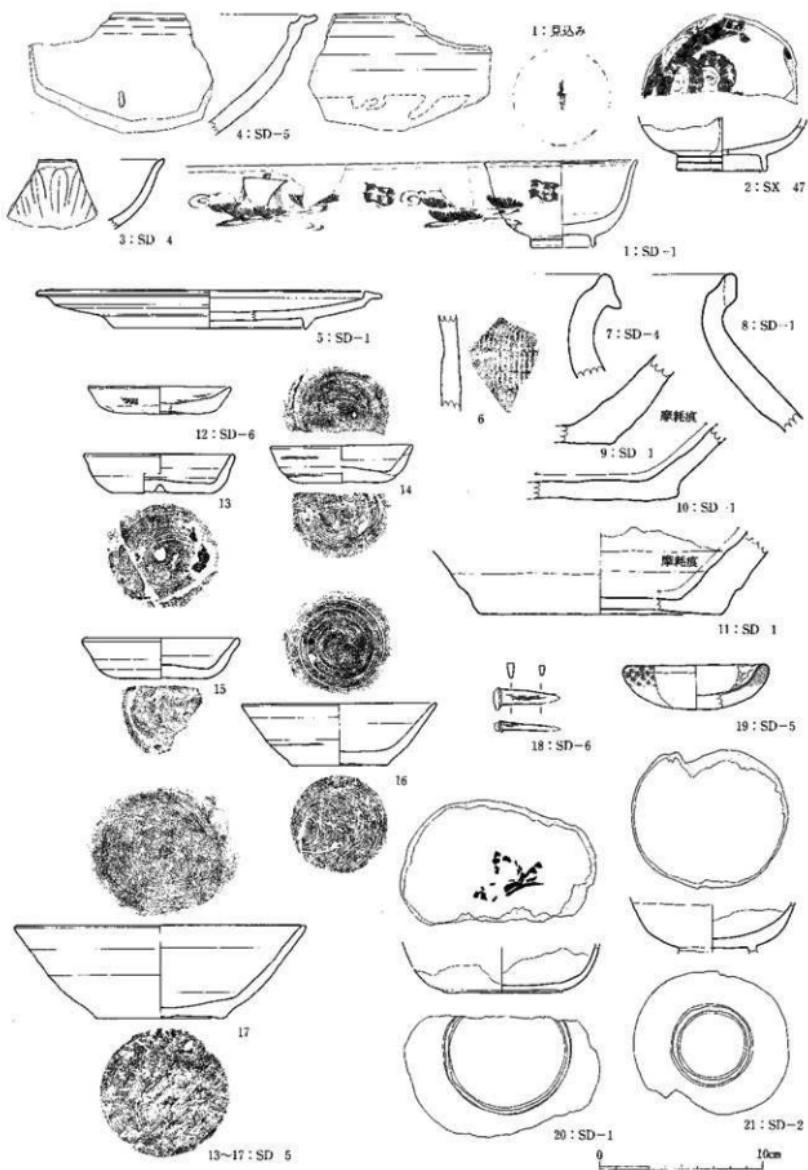
各遺構の埋土や表土から陶磁器類、土師質土器、鉄製品、土製品、木製品、石製品、古銭などが出土している。

陶磁器類

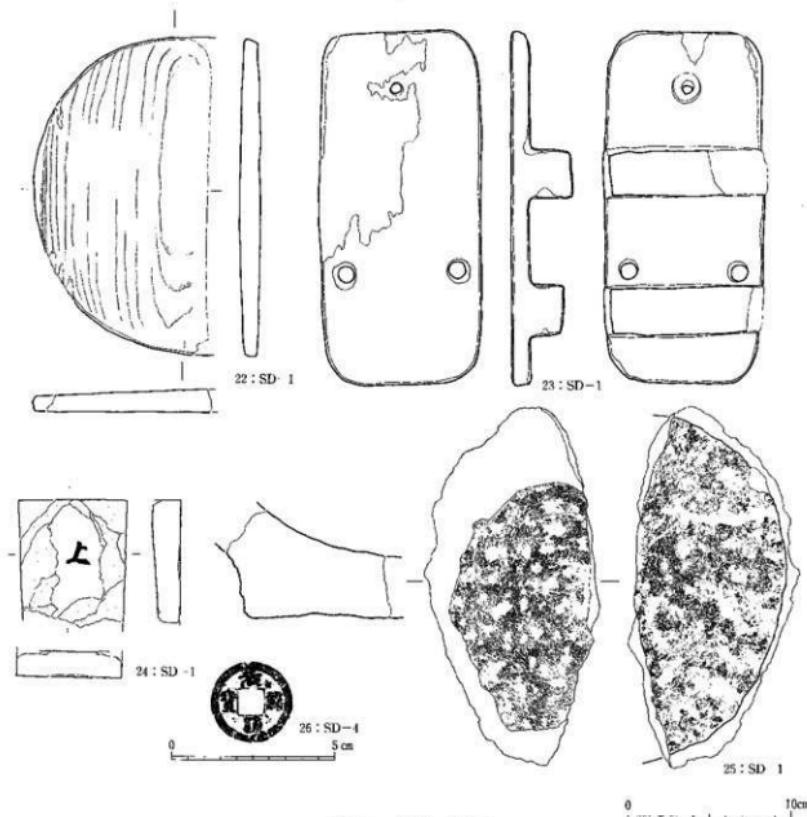
【染付磁器】1は外面にいわゆる「松原帆船図」が施されている端反形の碗である。口径9.2cm、底径3.7cm、器高5.3cmである。腰から高台部に三重の圓線をもつ。見込みに「寿」銘が見られる。貢入が著しい。19世紀中頃の肥前産の製品かと思われる。2は小皿である。底径5.4cm、器高は残存で3.4cmある。腰から高台部に三重の圓線をもつ。18世紀後半~19世紀の肥前産である。見込みの図柄は不明である。

【青磁】3は蓮弁文を施している龍泉窯系の青磁碗である。14世紀前後と思われる。

【施釉陶器】4は折縁の深鉢である。釉は浅黄色を呈し、内面刷毛がけ、外面は流しきかけが成されている。目跡が認められる。15世紀中頃の瀬戸焼である。5は行灯皿で、口径21.2cm、底径11.8cm、器



第5図 中近世の遺物(1)



第6図 中近世の遺物2)

高2.4cmある。細かな貫入がみられる。18世紀後半～19世紀、瀬戸・美濃産である。

【無釉陶器】6は簾状格子目の押印が施されている陶器小破片で、常滑産と考えられる。7・8は甕口縁部である。7は口縁部わずかに外反し端部が上下に延びてわゆる受け口状の口縁形態をとる。色調は赤灰色を呈し、焼成はやや軟質である。8は口縁端部が上方にのみ延びた受け口状口縁を呈する。色調は灰色を呈し、焼成は堅緻である。9・10・11は擂鉢底部である。10・11には内面に摩耗痕が認められる。

土師質土器

いわゆる「かわらけ」と称する素焼きで無高台の皿である。12は手づくねかわらけ、13～17はロクロ調整のかわらけである。13には盲孔が認められる。手づくねかわらけは口径8.6cm、底径4.9cm、器高1.7cmである。ロクロ成形かわらけは大・中・小の3タイプに大別される。大形(17)は口径17.6cm、底径7.8cm、器高5.7cm、中形(16)は口径11.8cm、底径5.7cm、器高3.8cmある。小形(13～15)は口径9.4～8.6

cm、底径6.0~5.2cm、器高2.5~2.3cmある。煤が付着しているものではなく灯明皿と認識できたものはない。小形(13~15)の底部は回転糸切り後体部下半から底部周縁にかけナデが施されており、このため立ち上がり部分が丸くなっている。これに対し中・大形(16・17)は回転糸切り無調整で立ち上がりはシャープである。底部内面の調整をみていると、14は中心部のみ1回ナデしている。16は全面をナデしており、工具によると思われる明瞭な痕跡も認められる。17は全面をナデ回している。また、13の体部立ち上がり部分の割れ口には回転糸切りの痕跡が認められることから、いわゆる「底部円柱づくり」技法によるものと考えられる。

鉄製品

18は刀子の茎と思われる。長さ4.3cm、幅1.4~0.5cm、厚さ0.4cmある。

土製品

19は坩堝である。口径8.5cm、高さ2.7cmある。内面に溶解物が薄く付着している。熱変化により非常に硬質化している。胎土には粗粒を含む。外面口縁付近から内面にかけてヒビがみられる。

木製品

20・21は椀と思われる。底径は20で7.2cm、21で4.5cmある。20は内面に朱漆が施され、薄い朱漆で文様が描かれているが、剥離が激しいため文様は不明である。外面は黒漆である。21は内外面とも朱漆である。20・21とも高台が付き、20は残存状況から極めて低い高台と思われる。22は曲物の底板で、直径19.5cmある。

石製品

24は短冊型の長方石硯で、石材は粘板岩である。長さ7.8cm、幅6.5cm、厚さ1.7cmある。丘の中央には「上」と思われる墨書きが認められる。25は石臼の下臼で、石材は安山岩である。高さ6.5cm、受け皿部の深さは残存で2.7cmある。

古錢

26は中国北宋時代の古錢「元祐通寶」である。初鑄年は1093年である。

2. 古代

古代の遺構は掘立柱建物跡3棟、溝跡7条、土壙9基である。遺構は黄褐色ローム層上面(地山面)で検出している。遺構の分布状況をみると、掘立柱建物跡、柱穴は調査区西側で、溝跡や土壙は調査区北側で検出している。溝跡や土壙についてはSD-11を除いて小規模なものばかりで、特に調査区北東隅に集中する傾向がある。これらの方向や規模に規則性は認められない。近接する溝跡、土壙が複雑に重複している。

以下、主要な遺構について説明を行い、その他は一覧表を作成した。

掘立柱建物跡

【SB-44】東西2間以上×南北2間以上の建物跡である。SB-45より古い。SB-46との新旧関係は不明である。柱間は南側柱列で1.7m、東側柱列で3.5mある。柱穴は長軸60cm、短軸50~40cmであり、

長方形を基調とする。深さは10cm程で、柱痕跡は径15cm程の円形である。pit1より非クロロ土師器坏の小破片が出土している。

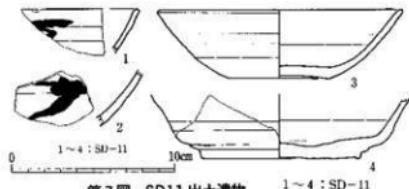
【SB-45】東西2間以上×南北4間の建物跡である。SB-44より新しい。SB-46との新旧関係は不明である。柱間は北側柱列で1.2m、東側柱列で2.7~1.5mある。柱穴は径60~20cmのほぼ円形である。深さは25~10cmで、柱痕跡は径15cm程の円形である。

【SB-46】東西1間以上×南北1間以上の建物跡である。SB-44・45との新旧関係は不明である。柱間は北側柱列で2.0m、東側柱列で2.5mある。柱穴は径50~30cmのほぼ円形である。深さは15cm程で、柱痕跡は径10cm前後の円形である。

溝跡(第7図)

【SD-11】調査区北側で検出された南北方向に延びると思われる溝である。SD-1より古く、整地層SX-48(28・29層)より新しい。上幅7m以上で、深さは約2.9mある。底面はほぼ平坦で、壁は非常に緩やかに立ち上がり、中途には軽い段が認められる。堆積土は4層(I~IV)に大別される。

I層(4~8層)は均質な堆積土で、極めて泥炭に近い。北方に向かって緩やかな勾配をもって広がり、北端で約1mの層厚をもつ。上面付近では未分解の植物遺体を含んでおり、堆積の最終段階では湿地を形成していたものと思われる。II層(9~13層)は黒色粘質シルト層であり、下部では部分的に粗砂層を介在する。III層(14層)は灰白色火山灰の堆積層である。IV層(15~26層)は黒色~灰オリーブ色の砂質シルト及び粗砂などの水成堆積層である。部分的に未分解の植物遺体を含む層が介在する。遺物は土師器と須恵器がありIV層(15~26層)出土が大部分である。土師器についてはロクロ調整と非ロクロ調整のものがある。第7図1・2はロクロ調整の土師器坏の破片で、墨書が認められる。3は底部回転糸切り無調整の須恵器坏である。4は須恵器高台付坏で、高台はケズリ出し技法によるものである。



第7図 SD-11 出土遺物 1~4 : SD-11

通番	No.	幅・3(m)	深さ(m)	厚(m)	平面形態	断面	備考
SD	12	4.7	0.5	0.5		SD-20・21・22・24・27より新しい SK-11より新しく、SK-12より古い	内見：土師器小破片が数点出土
SK	12	1.4	0.4	0.75	横円形		
SK	14	3.8	0.5	1.9	横円形	SK-16より新しく、SK-13より古い	
SK	18	0.9	0.1	0.5	横円形	SK-16・17より新しい	
SK	16	1.5	0.2	1.3	横開長形	SK-18より新しく、SK-14より古い	
SK	17	0.3	0.1	0.4	横円形	SK-15・16より古い	
SK	18	0.9	0.15	0.7	横円形		
SD	19	2.0	0.55	0.9		SD-20・21、SK-29より新しい	
SD	20	1.3	—	0.3		SD-19、SD-12より古い	
SD	21	2.3	—	0.5		SK-29より新しく、SD-19より古い	
SD	22	2.9	0.6	2.0	横円形	SD-20より新しく、SD-21より古い	
SD	23	1.7	0.1	0.5		SD-23より新しく、SD-13・SK-21より古い	
SD	24	0.8	—	0.4		SD-12、SK-22より古い	
SD	25	4.3	0.4	0.7		SD-21より古い	
SK	26	0.7	0.2	—	円形	SD-27より新しい	
SD	27	4.0	0.5	1.4	楕状	SD-12より古い	
SD	28	0.6	0.2	—	円形	SK-29より新しい	
SD	29	0.9	0.5	—	円形	SK-28、SD-19・21より古い	

表2 その他の古代遺構

第IV章 考 察

今回の調査で確認された遺構の性格及び年代について、時代ごとに若干の検討を行う。

1. 中近世の遺構と出土遺物

溝跡、井戸跡、土壙が確認された。以下、各遺構ごと検討する。

溝跡

12条確認された。規模、形状などによって調査区を南北に延びる大溝、弧状及び逆「コ」字形を呈する溝、幅1.5m以下の小規模な溝に分けることができる。

大溝には、まず調査区西側で確認された幅14.5mの南北溝(SD-1)がある。また、SD-2は調査区の制限から西半部のみの確認であったが、SD-1と平行して検出していることや断面観察からSD-1と同程度の規模をもつ大溝の可能性が高い。これらは『高清水要害掘敷絵図』で描かれている居所の東辺にある堀とほぼ同位置に対応していることから、高清水城(要害)の堀跡であると考えられる。

西側が開く、弧状及び「コ」字形を呈する溝には、SD-3・4・5がある。これらはほぼ同位置で検出され、重複関係よりSD-5→SD-4の変遷が明らかとなっている。いずれも人為的に埋め戻されている。これらは形状より「馬出(うまだし)」を構成する溝跡と考えられる。SD-3については重複関係は不明であるが、SD-5→SD-4の関係から、順次規模を拡大していったものと思われ、SD-5→SD-4→SD-3の変遷が推定される。

馬出とは虎口(城の出入口)の発達した一形態であり、「虎口(城の出入口)の前に土手、土手と堀、堀などを構え、城兵の出入を保護するとともに、敵兵の進退を妨げる設備」(『日本城郭辞典』鳥羽正雄著)のことと、その形状により角(かど)馬出、丸馬出、的山(あざち)馬出、曲尺(かね)馬出などの種類がある。今回確認されたSD-3・4は丸馬出、SD-5は角馬出に該当するものと思われる。また丸馬出は甲斐武田氏、角馬出は関東後北条氏が生み出し、多用したと伝えられている。

小規模な溝にはSD-6などがある。SD-6は直線的に延びる南北溝で、堆積土は自然堆積である。性格としては区画施設や取水・排水施設などが考えられるが、一部の検出にとどまっており、連結する溝や組み合う溝が確認されていないことから、性格は不明である。遺物は明確に年代を知り得るものではなく、手づくねかわらけの1点である。

その他の溝については長さ数m、幅、深さとも数cmの規模で、出土遺物もなく、その性格は不明である。

これらの重複関係を、主要なものでみると①SD-6→②SD-3・4・5→③SD-1・2という大枠で3時期の変遷が考えられる。以下、これらの年代を推定する。

遺物が比較的まとまって出土している溝跡はSD-1、SD-5のみである。またSD-5については土師質土器がまとまって出土しているが、年代は明確ではない。但し、SD-5埋土から15世紀中頃の瀬戸産折縁深鉢が出土しており、SD-5はこの年代以降の遺構である可能性がある。

また、馬出という遺構の性格から出現時期についてみると『城館調査ハンドブック』(千田嘉博ほか: 1993) のなかで「完成した馬出しの出現は武田氏、後北条氏の場合は永禄期(1558~1570)にさかのぼる」と考えており、少なくとも16世紀中頃には馬出が出現していたものとみられている。今回の調査では、これより約1世紀遅る15世紀中頃の遺物が出土しているが、1点のみであり、時期を限定するには不十分である。今後の調査報告を待って、馬出の出現時期を検討したい。

以上を踏まえて①期の年代を検討してみると、SD-6 の重複関係は堆積土に灰白色火山灰層を含む SD-11 より新しく、②期より古いことから、年代的には10世紀前葉以降で、②期の年代までは下らないと推定される。

③期を推定できる遺物は、SD-1 から19世紀中頃の肥前産染付磁器、19世紀前半の大堀相馬座(?)土鍋、18世紀後半~19世紀の瀬戸・美濃産行灯皿、SD-2 から19世紀の堤焼の甕など、18~19世紀頃の年代のものが主体で、中世陶器甕や明治期の大堀相馬座土瓶などが一部含まれている。遺物からは、③期の年代を18~19世紀頃と推定することができる。しかし、SD-1・2 は『高清水要害屋敷絵図』で描かれている堀跡に該当することから、少なくとも絵図が製作された貞享五年(1688年)には、これらは既に存在していたことになる。したがって、③期の年代は17世紀以降になるものと推定される。

井戸跡

4 基礎確認された。検出位置はすべて調査区南側で、ややまとまりをもって存在している。構造はいずれも素掘りである。底面まで調査できたものはないが断面形はほぼ筒状を呈する。井戸の規模は直徑が1.5m~0.9m の範囲に納まり、比較的小規模なものばかりである。なかには人為的に埋め戻されているものもあることから、ほぼ同位置で作り替えが行われたものと考えられる。いずれも年代を推定できる出土遺物はない。SE-7・8 の年代を考えると、遺構の重複関係から SD-5 以降であることがわかる。しかも SD-3・4 のもつ馬出という性格上、虎口付近に井戸の存在は考え難い。したがって、SE-7・8 は②期以降の年代である可能性が高いといえる。

土壙

7 基礎確認された。検出位置はすべて調査区南側でややまとまりをもつが、平面形、断面形、深さ、堆積土などの属性には規則性が認められない。

以上を踏まえ、高清水城の変遷についてまとめる。

まず SD-6 であるが、その性格は特定できなかった。これをもって高清水城があったとするには根拠が乏しく、「延文元年(1356年)」築城説の真偽のほどは不明である。しかし、延文元年(1356年)は①期の年代の範囲にあり、また南北方向に直線的に延びる検出状況から堀跡である可能性は否定できない。したがって、SD-6 が堀として機能していたと仮定するならば、この頃高清水城が築かれていた可能性はある。

15世紀中頃には、馬出という軍事的性格の強い施設が備えられていたことが明らかとなり、少なくともこの頃には「城」として高清水城が存在していたと考えられる。これは、文献で示された「天文年間(1532~54年)」築城説と年代的に一致する。

これらの変遷を細かくみると SD-5 → SD-4 → SD-3 の 3 時期になり、戦乱の世という歴史的環境から、比較的長期間にわたり馬出のような軍事性の強い施設が必要であったことがわかる。これらは変遷に従い順次規模を拡大しており、軍事面の強化を図っていたこともわかった。今回の調査では形態的に角馬出から丸馬出への推移が認められるが、その理由については不明である。これらはほぼ同位置で検出され、いずれも西に開いていることから、西隣には当時土橋や土壘があり、これらが組み合わされて馬出を形成していたと考えられる。

また、馬出(虎口)の検出位置が、絵図でみられるような城門が西側に備えられた構造とは異なって、居所の東辺にあたり、当時東側にあったことがわかった。

近世期には新たな普請を行い、馬出を配した軍事的な城から、大溝を配した城(要塞)になっている。この頃には歴史的環境の変化が起こり、城自体の軍事的性格は薄れていったものと考えられる。なお、今回の調査で絵図に描かれている土壘は検出されなかった。

また、近世期の大溝の配置に関しては、隣接する東館遺跡の昭和51年の発掘調査(加藤：1980)で、高清清水城跡と連絡すると考えられる東西溝が確認されている。検出位置は西に入り込む沢(湿地)で、堀の南壁及び北壁のみの検出であるが、上幅で30m 前後ある。報告された断面図をみると、壁面の立ち上がりは非常に緩やかであること、地形的に冲積地が入り込んでいるところに位置することから、この溝跡は近世期の城(要塞)の整備の一環として、自然地形を利用して作られた可能性が高く、その性格は防御性をもって城を囲い込む区画堀というよりは、むしろ高清清水城外堀の排水を担う水路としての性格が強いように思われる。

ところで、築城年代については「延文元年(1356年)」とする説と「天文年間(1532-54年)」とする説があることを前述したが、今回の調査結果から結論付けることはできなかった。しかし、「天文年間(1532-54年)」については、②期の年代と一致することから、この年代は②期遺構(SD-3・4・5)の年代を示すものと考えたい。一方、「延文元年(1356年)」については、②期以前の城の存在が考えられ、この場合、SD-6 がこの城に伴う可能性がある。

2. 古代の遺構と出土遺物

調査区北端部及び西端部において古代の遺構が確認された。遺構は掘立柱建物跡、溝跡、土壙である。

調査区西端で、3棟の掘立柱建物跡が確認された。SB-44 は、非ロクロ土師器坏の小破片が出土していることから、奈良時代のものと考えられ、その他も建物の方向をほぼ揃えていることから、おおよそ古代のものといえる。今回の調査では建物跡の一部しか確認できなかったが、調査区西側が地形的に高いことからも、西側に古代の遺構群の存在が予想される。

調査区北側で検出された SD-11 堆積土からは、土師器、須恵器が出土している。いずれも細片ではとんど図示することはできなかったが、土師器坏は非ロクロ調整の有段丸底のものとロクロ調整のものの(底部回転糸切り無調整)、須恵器には底部回転糸切り無調整のものが出土している。これらの特徴は、国分寺下層式期及び表杉ノ入式期のものであるから、SD-11 は古代に属する溝であることがわか

る。溝の性格は不明である。また、これらの遺物は西側から供給されたものと考えられる。

小規模な溝跡及び土壙は、重複が認められるものもあるが、新旧関係が不明なものが多い。また方向や規模に規則性は認められないことから、その性格は不明である。

第V章 ま と め

今回の調査成果を要約すると次のようにになる。

1. 高清水城跡は丘陵末端部の平坦面を利用して築かれている。
2. 今回の調査は高清水中学校体育館の移転新築に伴うもので、居所(本丸)の東辺付近の堀跡にあたる。
3. 高清水城築城以前、古代の集落があったことがわかった。遺構としては掘立柱建物跡、溝跡、土壙が確認された。出土遺物には土師器、須恵器がある。
4. 中近世の遺構として、溝跡、井戸跡、土壙が確認された。遺構の重複関係から3時期の変遷が考えられた。①期は遺構の性格が不明で、年代は特定できなかった。②期の馬出は出土遺物から15世紀中頃以降のものと考えられた。③期の堀跡は出土遺物や「高清水要害屋敷絵図」の製作年代から17~19世紀の年代が想定された。
5. 高清水城跡に馬出という施設があったことが確認され、中世期における軍事的性格の濃い高清水城跡の一端を窺い知ることができた。

参考・引用文献

高清水町史編纂委員会(1976)：『高清水町史』

高清水村風土記御用書出 (1780年、高清水村肝入鎌田新蔵、高清水風土記書上。)

高清水捨遺志 (1796年、東館々下の一農夫、高清水捨遺志を著す。)

* () は同所収の年表による。

兵藤 博行^{ab}(1994)：『新高清水風土記 石母田家と高清水の歴史』

藤沼 邦彦^{ab}(1981)：『日本城郭大系3 山形・宮城・福島』

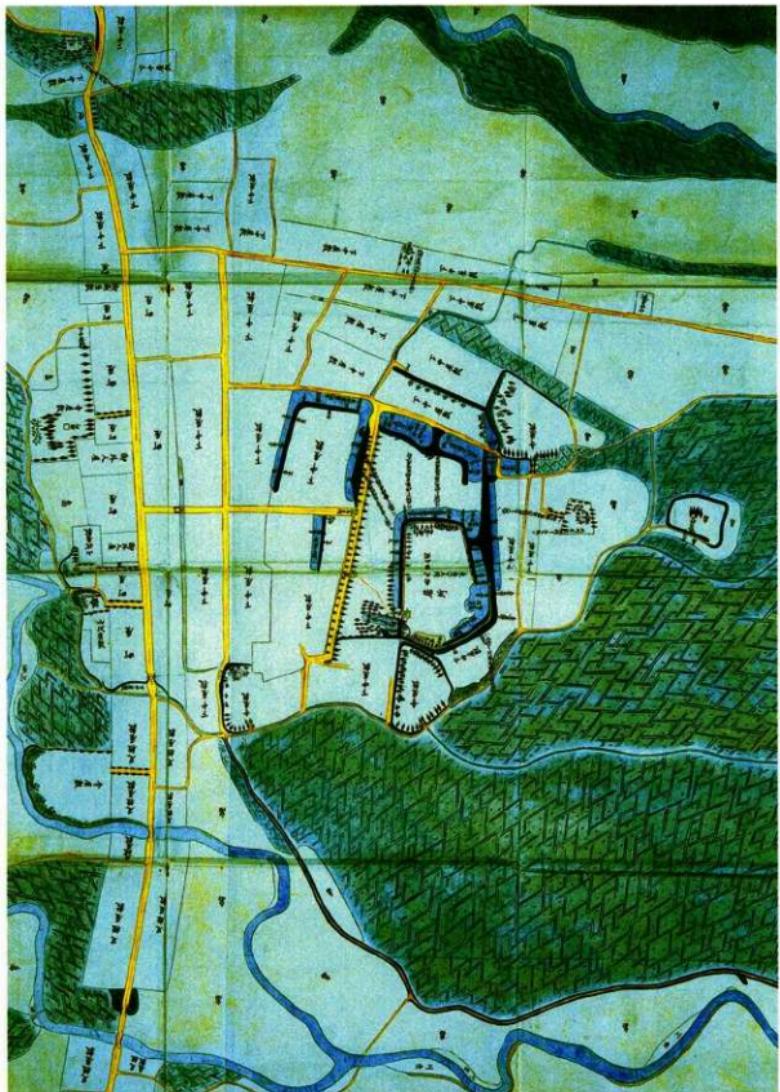
狩野 陸三 (1964)：『高清水物語 改訂版』

群馬県教育委員会(1988)：『群馬県の中世城館跡』

加藤 道男 (1980)：『東館遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書-III-』宮城県文化財調査報告書第65集

高橋 守克 (1980)：『新庄館跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書-III-』宮城県文化財調査報告書第65集

写 真 図 版



「高清水要害屋敷絵図」 貞亨五年（1688年）亘理藤吉製作
写真図版1



調査区全景（北から）



SD-1断面
写真図版2



SD - 3 断面



SD - 4・5 断面



SD - 6 断面



SD - 2 断面



SE - 7 断面



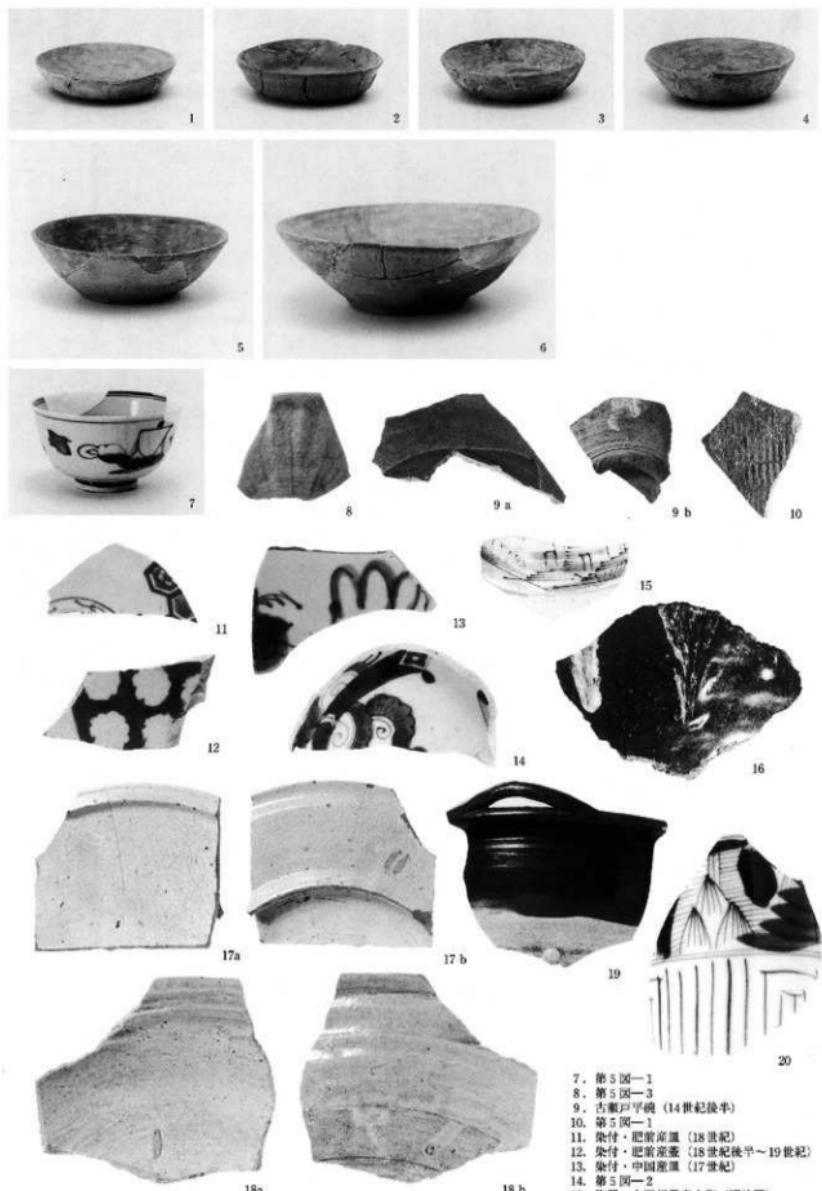
SE - 8 断面



SE - 9 断面

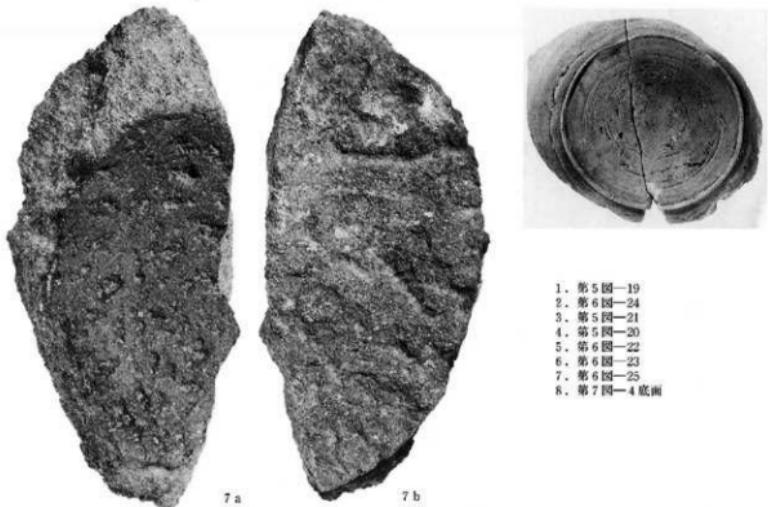
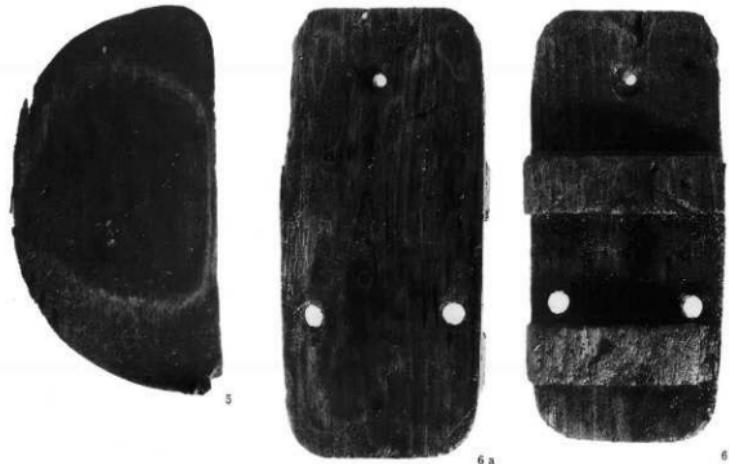
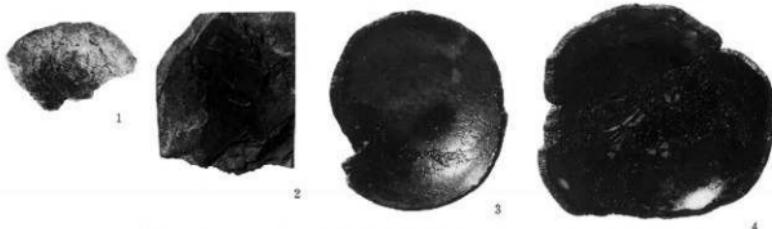


SD - 11 断面



写真図版 4

7. 第5図—1
8. 第5図—3
9. 古戸戸平碗（14世紀後半）
10. 第5図—1
11. 染付・肥前高麗（18世紀）
12. 染付・肥前高麗（18世紀後半～19世紀）
13. 染付・中国高麗（17世紀）
14. 第5図—2
15. 磁器・相馬高麗土瓶（明治期）
16. 磁器・堀坂焼
17. 第5図—5
18. 第5図—4
19. 磁器・大瀬相馬高麗土瓶（？）土瓶（19世紀）
20. 染付・平清水高麗（明治期）



1. 第5図—19
2. 第6図—24
3. 第5図—21
4. 第5図—20
5. 第6図—22
6. 第6図—23
7. 第6図—25
8. 第7図—4 底面

写真図版 5

報告書抄録

ふりがな	たかしみずじょうあと						
書名	高清水城跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	高清水町文化財調査報告書						
シリーズ番号	1集						
編著者名	佐藤貴志						
編集機関	高清水町教育委員会						
所在地	〒987-2186 宮城県栗原郡高清水町字中町39番地 TEL 0228-58-2111 FAX 0228-58-2759						
発行年月日	1998年(平成10年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	位 置	調査期間	調査面積	調査原因	
高清水城跡	宮城県栗原郡 高清水町字東館	市町村 045241	遺跡番号 44024	北緯 38度 40分 00秒 東経 141度 00分 00秒	970818～ 970918	1,900m ²	高清水中学校 体育館移転新築事業 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高清水城跡	城跡	中近世	溝跡 井戸跡 土壤	12条 4基 7基	陶磁器類 土師質土器 鉄製品 土製品 木製品 石製品 古錢	石母田氏の居城跡	
	集落跡	古代	掘立柱建物跡 溝跡 土壤	3棟 7条 9基	土師器 須恵器		

高清水町文化財調査報告書第1集

高 清 水 城 跡

平成10年3月25日印刷

平成10年3月31日発行

発行 高 清 水 町 教 育 委 員 会

〒987-2133 栗原郡高清水町字桜丁5

電話 0228-58-2204

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24

